イナズマイレブン~もう一つの伝説~

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イナズマイレブン～もう一つの伝説～

【Ｎコード】
Ｎ６９３１Ｒ

【作者名】
ＺＥＲＯ

【あらすじ】
イナズマジャパンがＦＦＩで優勝した次の年、再びフットボールフロンティアが開催される。これは、フットボールフロンティアで優勝を目指す、一つの小さなサッカー部の物語である。※この物語は雷門ではなく、作者が考えた学校が舞台となります。それに嫌悪感を感じた方はブラウザバックをお勧めします。

登場人物紹介（前書き）

初投降です。

主人公以外はゲームのスカウトキャラです。キャラの性格などはゲームでの紹介文や見た目で勝手に考えました。尚、オリジナル必殺技多数です。

学校の名前に特に意味はありません。

登場人物紹介

登場人物紹介

―名前―
【天童銀華（てんどうぎんか）】

―性別―
【男】

―ポジション―
【ＦＷ】

―属性―
【風】

―年齢―
【１４】

―人物―

天照(あまてらす)中学サッカー部のキャプテン。2年生。

輝くような銀髪に整った顔立ちの少年。基本的に無気力で口が悪いが、サッカーやチームメイトに対しての情は厚く、かなりの人望がある。1年の頃にサッカー部を設立した張本人。ポジションはフォワードだが、ディフェンスも出来るオールマイティ型。雷門のキャプテンである円堂とは小学校の頃のサッカー友達。

―必殺技―

・シルバーブレット
シュート技
一度空中に蹴り上げ、落ちてきたボールを回し蹴りで思いっきり蹴り飛ばす技。名前の通り銀色の弾丸のように飛んでいく。シュートチェインにも使える。

・シルバーカーテン
ディフェンス技
ボールを持った相手の目の前に銀色のオーロラのような壁を出現させ、相手が怯んだ隙にボールを奪う技。シュートブロックにも使える。

―名前―
【中谷真之（なかたにまさし）】

―性別―
【男】

―ポジション―
【ＦＷ】

―属性―
【林】

―年齢―
【１４】

―人物―

天照中学サッカー部所属。２年生。

『奈良最強』と呼ばれる天才プレイヤー。その名の通りかなりの実力だが、騙されやすい性格のため人間不信に陥り、一時期サッカーを辞めてしまった。その後、父親の転勤で奈良から東京に引っ越し、

天照中学に転校。だが人間不信のためクラスと馴染まずに孤立していた。しかし『奈良最強』という名を聞いた天童銀華に出会い、サッカー部の設立に勧誘される。初めは断っていたが、次第に銀華のサッカーに対する情熱に惹かれていき、「もう一度人を信じてみよう」と思い、サッカー部に入部した。しかし、人間不信はそう簡単には治らず、サッカー部員以外に話しかけられると超ビビる。銀華は自分にもう一度サッカーの楽しさを教えてくれた恩人と思っている。

―必殺技―

・浴びせ蹴り
シュート技
ジャンピングニーでボールを蹴り上げ、そのまま空中から踵でボールを蹴り飛ばすアクロバティックシュート。シュートチェインにも使える。

・透明フェイント
ドリブル技
自らの姿を消し、相手が戸惑っている間に抜き去る技。なぜ姿を消せるのかは本人も分からない。

―名前―
【紫電戒（しでんかい）】

―性別―
【男】

―ポジション―
【ＧＫ】

―属性―
【風】

―年齢―
【１４】

―人物―

天照中学サッカー部所属。２年生。

スポーツ万能、頭脳明晰の才色兼備を持った少年だったが、段々と自分と渡り合える者がいなくなり、退屈な学校生活を送っていた。しかしある日、サッカー部の設立を目指していた銀華と出会う。そ

してちょっとした気まぐれで銀華の練習を見学。そこで見た銀華のプレイに衝撃と感銘を受け、サッカー部に入部。最初はゴールキーパーをすることを渋っていたが、次第にその才能を開花させた。

―必殺技―

・紫電一閃

キーパー技　キャッチ

腕から手にかけてまるで刀のようなオーラを纏い、飛んできたボールを居合い抜きの要領で斬り裂く技。そのオーラから放たれる鋭くも美しい光に、味方だけでなく相手をも魅了する。

―名前―

【月野楽太（つきのらくた）】

―性別―

【男】

―ポジション―

【ＦＷ】

―属性―

【山】

―年齢―

【１４】

―人物―

天照中学サッカー部所属。２年生。

カタールからの帰国子女。ラクダのようにのんびりと散歩するのが大好き。ゆえにあだ名も『ラクダ』となっている。日本に帰国してすぐ天照中学に入学。そこで銀華と出会い、共にサッカー部の設立を目指す。カタールの砂漠で鍛えられた常人離れしたスタミナと頑丈な身体を持つ。因みにカタール代表『ビヨン・カイル』とは親友。

―必殺技―

・ミラージュシュート

シュート技

蜃気楼でボールを二つに分裂させる幻惑シュート。ビヨン・カイル直伝の必殺技。

・デザートストーム
ディフェンス技
強烈なサマーソルトで砂嵐を起こし、相手を怯ませた隙にボールを奪う技。

―名前―
【中目栞（なかめしおり）】

―性別―
【女】

―ポジション―
【ＭＦ】

―属性―
【林】

―年齢―

【１４】

―人物―

天照中学サッカー部、兼、図書委員長。２年生。

手作りのしおりを作るのが大好きな少女。初めはサッカーに興味はなく、テレビで見たことある程度だったが、とある出来事で銀華にサッカーの才能を見抜かれ、サッカー部の設立の為に勧誘される。最初は断っていたが銀華の必死の頼みに渋々仮入部という形で入部した。しかし、サッカーに触れていく内に段々とサッカーの才能が目覚めていった。現在は図書委員長を兼任にながらも正式な部員となっている。選手だけではなくマネージャーの仕事もしている。サッカーだけではなく、銀華自身にも惹かれていっているのは彼女だけの秘密。因みに本人は否定しているがかなりのドジっ子。

―必殺技―

・ブックマーク

ブロック技

相手の足元に巨大な本のようなものを出現させ、それを閉じて相手を押しつぶす技。喰らった相手はその名の通り、栞のようにペラペラになる。

・スクリプトバスター

シュート技

ボールに英語などの様々な文字を纏わせ、それを思いっきりシュートする技。シュートされたボールは色んな文字と共に飛んでいく。

―名前―
【沖宮敬乃（おきみやたかの）】

―性別―
【女】

―ポジション―
【ＭＦ】

―属性―
【風】

―年齢―

【14】

―人物―

天照中学サッカー部所属。2年生。

離れ小島の神社でたまに父親を手伝って巫女をやっている少女。女友達からは『おきちゃん』と呼び慕われている。特に栞とは仲が良く、サッカー部も彼女の紹介で入部した。最初はマネージャーをしていたが、他の部員のプレイを見ている内に自分もやってみたくなり、選手となった。視野が広く、相手の動きを良く見てから的確なパスを出す。

―必殺技―

・神隠し
シュート技
ボールを蹴ると同時にボールが消える。するとどこからか鳥居が出現し、そこからボールが飛び出してくる不気味なシュート。シュートチェインにも使える。

・オーロラドリブル
ドリブル技
綺麗なオーロラを出現させて相手が見とれている間に突破する技。それを見た相手の気分はもうアラスカ。

―名前―
【風切彰（かざきりしょう）】

―性別―
【男】

―ポジション―
【ＤＦ】

―属性―
【風】

―年齢―
【１３】

―人物―

天照中学サッカー部所属。1年生。

風を受けながら自転車で走り回るのが大好きな少年。元々サイクリング部に入るつもりだったが、既に廃部していた。そこで同級生のツバサに誘われてサッカー部に入部。自転車で走って鍛えられた脚力とスピードを活かしたプレイが得意。チーム一の俊足を誇る。

―必殺技―

・サイクロン
ディフェンス技
鋭いキックで竜巻を起こし、ボールごと相手を吹き飛ばす技。

・クイックドロウ
ディフェンス技
居合い抜きのように目にも止まらぬ速さでボールを奪い取る技。

―名前―
【小龍翼（しょうりゅうつばさ）】

―性別―

【男】

―ポジション―

【ＭＦ】

―属性―

【風】

―年齢―

【１３】

―人物―

天照中学サッカー部所属。１年生。

サッカーをこよなく愛する少年。髪の色もまるでサッカーボールのように白黒になっている。小さい頃からサッカーをしており、ボール捌きならチームで一番上手い。身軽さもチーム一で、まるで羽が生えているかのように動き回れる。サッカー部の期待の新人。

―必殺技―

・ジグザグスパーク

ドリブル技

イナズマのようなジグザグドリブルで近くに居る相手を痺れさせる

技。

・ウィングドライブ
シュート技
空高くにあるボールをオーバーヘッドキックでシュートする技。シュートされたボールには翼が生え、まっすぐゴールにむかって飛んでくる。ロングシュートにも使える。

―名前―
【穴沢季多留（あなざわきたる）】

―性別―
【男】

―ポジション―
【ＤＦ】

―属性―

【火】

―年齢―

【13】

―人物―

天照中学サッカー部。1年。

平らなところがあると何故か穴を掘りたくなるという妙な性癖を持つ少年。今はその性癖をサッカーの必殺技に応用している。ゆえに、彼の必殺技は穴を掘る技が多い。

―必殺技―

・Uボードドリブル技

ボールと一緒に地面の中に潜み、相手に気付かれないように抜き去る技。

・モグラシャッフルドリブル技

モグラフェイントの応用技。穴の中に偽物のボールを紛れ込ませる技。

・落とし穴
ブロック技
向かってきた相手の足元に穴を出現させ、そこに相手を落とす技。

―名前―
【部島亨（へじまとおる）】

―性別―
【男】

―ポジション―
【ＭＦ】

―属性―
【林】

―年齢―
【13】

―人物―

天照中学サッカー部所属。1年生。

学年一の頭脳を誇る少年。作戦などを立てるのが上手いが、説明するのが下手な為、いつも銀華を介してチームに伝える。実質チームの司令塔である。音楽が大好きでいつもヘッドフォンを首からぶら下げている。

―必殺技―

・スーパースキャン
ディフェンス技
持ち前の頭脳で相手とボールの動きを先読みし、ボールを奪い取る技。

・エコーボール
ドリブル技
ボールから不思議な音波を放ち、相手を惑わせて突破する技。

―天照中学サッカー部―

東京の端の方にある小さな中学校のサッカー部。元々サッカー部は存在しなかったが、１年の終わり頃に銀華が中谷、紫電、ラクダ、しおりを集めて設立した。そして次の年に沖宮、風切、ツバサ、穴沢、部島の五人が入部し、ようやく試合が出来るようになった。監督は不在な為、サッカー未経験者の顧問が代理をしている。なので、練習内容などのほとんどはキャプテンの銀華が担当している。

プロローグ（前書き）

グダグダですが、読んでくださるとありがたいです。

キャラたちの会話で見分けがつかない場合がありますのでキャラ同士の会話では

キャラ

「〜〜〜〜」

とさせていただきます。

プロローグ

ＦＦＩでイナズマジャパンが優勝した次の年の春…日本ではサッカー大ブームが起こっており、どこの学校でもサッカー部が盛んだった。

東京のとある小さな中学校。『天照中学』も例外ではなかった。

銀華
「行くぞ、中谷！」

腕にキャプテンマークをつけた銀髪の少年、『天童銀華』の声がグランドに響く。

中谷
「よっと…」

彼からのパスを緑色の髪の少年、『中谷真之』が受け取り、ドリブルで上がっていく。

沖宮

「しおり！」

しおり
「任せておきちゃん！やぁぁあ！！」

ポニーテールの少女『沖宮敬乃』の指示を聞き、金髪の少女『中目栞』が中谷にスライディングを仕掛ける。

中谷
「くっ…ツバサ！」

ツバサ
「はいっ！」

スライディングを間一髪でかわした中谷は、髪が白黒の少年『小龍翼』にボールを渡す。それを受け取ったツバサは一気に上がって行き、ゴール前までやって来た。

シデン
「来いっ！」

草の冠を被った少年『紫電戒』がゴール前で構える。

ツバサ
「行きます！ハァァアア！」

ツバサはゴールの端を目がけて思いっきりシュートを放った。

シデン
「甘い！」

シデンは横に飛び、ボールをキャッチした。

ピィィィィイ！

その瞬間、ホイッスルが鳴った。

部島
「終了で～す」

首にヘッドフォンを掛けた少年『部島亨』の声が響く。その声と同時に四対四のミニゲームが終了する。

銀華

「よ～し、今日の練習はここまで。各自しっかりストレッチしとけよ？」

『はい！』

キャプテンの銀華の指示に部員が声を揃えて返事をする。と言っても、部員は銀華を含めて１０人しかいないのだが……

銀華
「あ、そうだ……お～い、みんな注も～く」

ストレッチをしていると、何かを思い出した銀華が気の抜けた声で全員を呼ぶ。

しおり
「なに？銀華君」

部員を代表してしおりが銀華に問い掛ける。

銀華
「いや～ちょっと言い忘れてたことがあってよ……」

頭をボリボリとかきながらのんびりとした口調で言う銀華。

銀華
「実は、他校との練習試合が決まってよ」

風切
「練習試合……っスか？」

ラクダ
「この部が出来て初めての試合だね」

頭に鉢巻を巻いた少年『風切彰』とターバンを巻いた少年『月野楽太』通称ラクダが意外そうに言う。

穴沢
「それで、どことやるんですか？先輩」

髪をオールバックにした少年『穴沢季多留』が問い掛けると、銀華は相変わらずのんびりとした口調で言う。

銀華
「ん？雷門中」

その刹那……

『えぇぇぇぇぇぇ！！？』

部員全員が驚愕の声を上げた。

中谷
「ちょ、ちょっと待って銀華！雷門中って、あの雷門中！？」

銀華
「その雷門中だよ」

シデン
「本当か！？どうやってあの雷門中との練習試合を取り付けたんだ！？」

銀華
「あぁ、雷門のキャプテンの円堂先輩とは小学校の頃のサッカー友達でな。この前久しぶりに連絡を取って『練習試合やろ』って言ったら『いいよ』って」

『軽っ！？』

全員がツッコミを入れる中、しおりだけがキョトンとしていた。

しおり
「？ねぇ、その雷門中ってそんなに凄い学校なの？」

その発言に沖宮が呆れた表情をする。

沖宮
「しおり…少し位は他校のことを調べときなさいよ……」

しおり
「あ、えっと……えへへ……」

笑って誤魔化そうとするしおりに苦笑いをしながら中谷が説明をする。

中谷
「あはは……雷門中はね、去年のフットボールフロンティアの優勝校であり、しかもＦＦＩの日本代表がもっとも多く選出された有名な学校なんだよ」

シデン
「今年のフットボールフロンティアでも優勝候補の一つに上がっているんだ」

しおり
「へぇ～そんな凄い学校と試合できるんだ！ラッキーだね！」

ラクダ
「まぁ、そう考えればある意味ラッキーかもね」

穴沢
「でも、僕たちは１０人しかいませんよ？試合をするにはあと一人いないと……」

ツバサ
「大丈夫だよ。サッカーは最低でも7人いれば試合はできるからさ」

部島
「それで、その練習試合の日取りはいつですか？」

銀華
「ん？明日」

『早っ！！？』

銀華の発言に総動員で二度目のツッコミを入れる。

ツバサ
「せ、先輩！それって普通、前もって言うものじゃないですか！？」

銀華
「だから言ったじゃん。忘れてたって」

風切
「いつから決まってたんっスか！？」

銀華
「一ヶ月前」

『忘れすぎだっ！！』

全員での三度目のツッコミ。何かもうツッコンでばかりである。

銀華
「えーっと…じゃあそんなわけで、しっかりとストレッチをして明

日に疲れを残さないように。以上、解散！」

そう言い残して一目散にその場をあとにする銀華。

『……逃げたな』

部員達のそんな呟きが聞こえたが、銀華は無視した。

そんなこんなで、雷門との練習試合が決定したのであった。

プロローグ（後書き）

次回は雷門中との試合です。

対決！雷門中学・前編（前書き）

雷門との試合です。

上手く書けているかはわかりませんが、頑張りました！

グダっているかもしれませんが、読んでいただけると幸いです。

対決！雷門中学・前編

翌日。天照中学サッカー部は雷門中学の校門前にやって来ていた。

中谷
「うわぁ～これが雷門中か……」

シデン
「デカいな…さすがマンモス校だ」

中谷とシデンが校舎を見渡しながら感心したように声を出す。その二人だけではなく、他のメンバーも物珍しそうに辺りを見渡していた。すると、校舎の方から一人の少女が駆け寄ってきた。

？
「あの～…天照中学のサッカー部の方ですか？」

銀華

「あ、はいそうです。えっと…マネージャーさんで？」

秋
「はい、サッカー部マネージャーの木野秋です。グランドまでご案内します」

『よろしくお願いします』

メンバー全員そう言って、秋の後ろをついていった。

しばらく着いて行くと、グランドが見えてきた。そこでは練習をしているサッカー部の姿がある。

秋
「円堂くーん！天照中学の人たちが来たよー！」

秋がグランドに向かって大声でそう言うと、ゴール前に立っているバンダナを巻いた少年がこちらに向かって走ってきた。

円堂
「銀華！」

銀華

「円堂さん！」

二人がお互いの名前を呼ぶと同時に二人は握手を交わした。

円堂
「久しぶり。よく来たな！」

銀華
「本当にお久しぶりです。円堂さんが小学校を卒業して以来ですね」

と、銀華は笑顔でそう言うが、円堂は何やら意外そうな顔をしていた。

円堂
「な、なぁ銀華……」

銀華
「はい？何ですか、円堂さん？」

円堂
「……その喋り方、やめてくれ」

銀華
「あ、やっぱり？」

途端に元の口調に戻る銀華。

銀華
「一応一つ年上だから敬意を払ったんだがな」

円堂
「お前が敬語を使うと、何か気持ち悪いんだよ」

銀華
「ヒデー言われようだな」

頭をボリボリとかきながら言う銀華。

円堂
「そいつらが、お前の仲間か？」

円堂の視線が銀華の後ろのチームメイトに行く。

銀華

「あぁ。一年掛かっちまったけど、ようやく集まった俺の仲間達だ。
でも、まだ１０人しかいないから、悪いが円堂、そっちも１０人で
戦ってくれないか？」

円堂
「わかった。じゃあ早速、試合しようぜ！」

銀華
「すんません…アップぐらいはさせてくれませんか！？」

円堂
「あ、あはは～！悪い悪い」

先々と話を進めていた円堂は苦笑いを浮かべた。

銀華
「変わってないな、そのサッカーバカっぷりは……」

しおり
「銀華君も人のこと言えないと思うけど……」

銀華
「うるさい黙れしおり」

しおり
「うぅ…」

銀華に暴言を吐かれてショボンとするしおり。それを隣りで沖宮が慰めていた。

その後、天照サッカー部は雷門のグランドを借りて試合前の練習をしている。その頃、雷門側のベンチでは……

円堂
「さぁみんな！気合入れて行くぜ！」

と、円堂はやる気満々だが、一部のメンバーはこの試合に不安を持

っているようだ。

染岡
「なぁ円堂。この試合俺たちが出るようなもんか？二軍の連中に任せた方がいいんじゃねぇか？」

去年のＦＦＩで雷門サッカー部のメンバーが急増したため、現在は二軍、三軍とチームが出来ているのである。

豪炎寺
「鬼道、どう思う？」

鬼道
「確かに天照中学なんて聞いたことがない。が、円堂の昔の友人なら油断は出来ないかもな」

染岡
「けどよぉ、女をチームに入れてるんだぜ？」

染岡がそう言うと、メンバーの視線が練習をしているしおりと沖宮に行く。

沖宮

「しおり、パス！」

しおり
「オーライオーライ…きゃんっ！？」

『あ……』

雷門メンバーの全員の声が重なった。何故なら、しおりは何もないところで躓いて転んだのだ。

半田
「……本当に、大丈夫なのか？」

マックス
「さぁ……？」

ちゃんとした試合になるのかと不安になるメンバー。そんなメンバーに円堂が口を開く。

円堂
「と、とにかく！どんな相手だろうと、全力でプレイするんだ！やるぞ！」

『お、おー……』

円堂の号令もどこかぎこちなく、返事もぎこちなかったのだった。

そして、試合開始直前。天照側ベンチでは、メンバー全員で円陣を組んでいる。

銀華

「円堂以外の雷門はおそらく俺たちを舐めきっている。必死に練習した俺たちの力を見せ付けて、度肝を抜いてやろうぜ！！」

『おう！』

銀華
「んじゃあ天照サッカー部…行くぞぉ！！」

『おおぉーー！！』

グランドに大きく響く号令と共に、メンバーはそれぞれのポジションについていく。

天照側フォーメーション

FW
中谷　銀華　ラクダ

MF
しおり　沖宮　ツバサ

DF
穴沢　部島　風切

GK
シデン

雷門側フォーメーション

FW
豪炎寺　染岡

MF
半田　鬼道　虎丸　マックス

DF
風丸　壁山　栗松

GK
円堂

角馬
『さぁ始まりました！雷門中対天照中の一戦！新生チーム天照中は雷門中にどこまで喰らいつけるのか！？実況は私、角馬圭太でお送りいたします！！』

ピィィィィ

角馬
『ホイッスルとともに今キックオフ！』

染岡
「行くぞぉぉお！！」

角馬
『染岡がドリブルで上がっていく！』

染岡
「さっさと終わらせてやるぜ！」

しおり
「させない！」

角馬
『そこへ中目が立ちはだかる！』

染岡
「どけぇ！」

しおり
「どかない！！」

しおりがそう叫ぶと、染岡の足元に巨大な本が出現する。

染岡
「な、なんだ！？」

しおり
「ブックマーク！！」

しおりが叫ぶと同時に本が閉ざされ、染岡が押しつぶされる。

染岡
「うわぁぁああ！！」

しおり
「やった！」

角馬
『中目が染岡からボールを奪取！そのまま上がっていく！』

風丸
「行かせない！」

しおり

「今だ……中谷君！」

風丸
「っ！？しまった！」

角馬
『中目から中谷へボールが渡った！ゴールは目の前だ！！』

中谷
「行くぞ！」

ボールを受け取った中谷はジャンピングニーでボールを蹴り上げ、そのまま空中へ飛び上がり、踵でボールを蹴り飛ばす。

中谷
「浴びせ蹴り！！」

角馬
『中谷の強力なシュートがゴールは向かっていく！』

円堂
「ゴールは割らせない！！」

そう言うと円堂は拳を作り、思いっきり足を振り上げる。

円堂
「正義の鉄拳Ｇ５！！」

黄金に輝く拳が中谷のシュートと激突する。

円堂
「うおぉぉぉぉお！！」

しばらくの激突の後、円堂の拳がシュートを跳ね返す。

円堂
「よっしゃ！！」

シュートを跳ね返した円堂はガッツポーズを取る。が…

銀華
「かかったな！円堂！」

円堂

「え！？」

見ると、そこには円堂が弾いたボールに向かって走っている銀華の姿があった。

銀華
「正義の鉄拳を使って腕を振り切った状態じゃあ、すぐに別の必殺技は使えないだろ！！」

円堂
「しまった！！」

円堂がすぐに体勢を立て直そうとするが……

銀華
「シルバー……ブレットォ！！！」

銀華が落ちてきたボールをそのまま回し蹴りで蹴り飛ばすと、ボールは銀色の弾丸となってゴールに向かって一直線に飛んでいく。

円堂
「くっそぉ！」

体勢を立て直した円堂がボールに向かって横飛びで飛びつくが、後一歩のところで届かず、ゴールネットを揺らすことになった。

角馬
『ご、ゴォォォォル！！一体誰がこの状況を予想した！？天照中、まさかの先制です！！』

銀華
「いよっしゃぁぁぁぁあ！！」

しおり
「やったぁ！」

中谷
「あの雷門から先制を奪ったぞぉ！」

『うおぉぉぉおお！』

ハイタッチをかわしながら湧き上がる天照メンバー。それとは逆に呆然とする雷門メンバー。

染岡

「嘘…だろ？」

風丸
「すまない。完全に油断した」

栗松
「でもアイツら、凄い必殺技を持ってるでヤンス」

未だに失点したことが信じられない雷門メンバー達。すると、メンバーの後ろからパンパンと手を叩く音がした。

円堂
「ドンマイドンマイ！まだ一点だ！取り返して行くぞ！」

『お、おう！！』

円堂の号令に戸惑いながらも答え、再びポジションにつくメンバー。

角馬
『さぁ、一点先制された雷門。巻き返しなるか！？』

染岡

「今度こそ！」

角馬
『染岡が再びドリブルで上がっていく！』

しおり
「行かせない！」

染岡
「くっ……」

鬼道
「こっちだ！」

染岡
「チィッ！」

舌打ちをしながら鬼道にパスを出す染岡。それを受け取った鬼道はドリブルで上がっていく。

ツバサ
「行かせませんよ！」

鬼道
「フッ…真・イリュージョンボール！！」

ツバサ
「なっ！？」

すると、鬼道が持っていたボールが複数に増える。そしてツバサが戸惑っている間に鬼道はツバサを抜き去った。

鬼道
「豪炎寺！染岡！」

鬼道が叫ぶと、豪炎寺と染岡は頷き、ゴール前へと上がっていく。

部島
「穴沢！沖宮！１１番をマーク！風切は僕と１０番をマークだ！」

穴沢・沖宮・風切
「「「おう！！」」」

部島の指示を聞き、穴沢と沖宮は染岡へ、部島と風切は豪炎寺のマークへとついた。

鬼道
「よし……今だ虎丸！」

虎丸
「はい！」

「「「「なっ！！？」」」」

角馬
『おっとぉ！天照、完全に逆をつかれたぁ！雷門の超新星、宇都宮が上がっていく！』

虎丸
「行くぞぉ！」

虎丸が咆哮すると、虎丸の背後に虎のオーラが出現する。

虎丸
「タイガードライブ…Ｖ２！！」

角馬

『虎丸の強烈なシュートがゴールに迫る！これは決まったかぁ！？』

シデン
「ゴールは……私が守る！」

シデンが手を掲げると、腕から手にかけて刀の形をしたオーラが纏われる。

シデン
「紫電…一閃！！！」

そして居合い抜きの要領で飛んできたボールに斬りかかる。

シデン
「ハァァァ……せいやぁ！！」

そして紫電の輝きと共にボールが真っ二つに切り裂かれた。

角馬
『止めたぁぁ！天照のゴールキーパー紫電！虎丸のシュートを止めてしまったぁ！』

虎丸
「そんな……」

鬼道
「虎丸のシュートを止めるとは……！」

渾身のシュートを止められ、ショックを受ける虎丸と衝撃を受ける雷門メンバー。

部島
「シデン先輩、こっちです！」

シデン
「よし！」

部島にボールを投げ渡すシデン。それを受け取った部島は再び声を張り上げる。

部島
「行きますよ！必殺タクティクス！！」

鬼道
「何！？必殺タクティクスだと！？」

雷門メンバーが驚愕している間に天照メンバーは行動を開始する。

部島
「ツバサ！」

部島からツバサに向かってシュート並の威力を持ったパスが放たれる。

ツバサ
「ラクダ先輩！」

そのボールを受け止めず、威力をそのままにラクダに向かってダイレクトパスを放つ。

ラクダ
「中目さん！」

ラクダも同様にシュートのような威力でしおりにダイレクトパスを放つ。

半田

「くそっ！」

壁山
「速すぎるっス！」

角馬
『天照中！超スピードでパスを回して行く！余りのスピードに、雷門は対応できない！！』

部島
「そう。シュートと同じ威力とスピードを維持したままダイレクトパスを回す僕たちの必殺タクティクス。その名も、ソニックブーム！」

それからも、しおり→沖宮→中谷→銀華へと超速ダイレクトパスが繋がる。

角馬
『超速パスが繋がり、天童、あっという間に雷門のゴール前だ！』

円堂
「来い、銀華！」

銀華
「行くぞ！」

そう言うと、銀華はボールを蹴り上げ、そのまま落ちてきたボールに向かって回し蹴りを放つ。

銀華
「シルバー…ブレットォ！！」

先ほどと同じ銀色の弾丸がゴールへと迫る。

円堂
「今度は止めてみせる！」

円堂は右手にエネルギーを溜め、そのまま飛び上がる。すると、円堂の背後に魔神が現れる。

円堂
「いかりのてっつい…Ｖ３！！」

そして飛んできたボールを地面に叩きつける。

円堂
「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！」

すると、ボールは完全に勢いを失い、円堂の足元に転がった。

円堂
「よし！」

銀華
「チッ！」

角馬
『止めたぁ！円堂、天童のシュートをガッチリと止めたぁ！』

円堂
「行くぞ！反撃だぁ！」

円堂が投げたボールを風丸が受け取り、ドリブルで上がっていく。

しおり
「行かせない！」

そんな風丸の前にしおりが立ちふさがるが……

風丸
「疾風ダッシュ・改！！」

しおり
「あぁ！」

その名の通り、疾風のような速さでしおりを抜き去った。

風丸
「虎丸！」

そのまま虎丸にパスを渡し、それを受け取った虎丸は上がっていく。
その隣りを豪炎寺が走る。

豪炎寺
「行くぞ、虎丸！」

虎丸
「はい！」

二人が頷き合うと、豪炎寺は飛び上がり、虎丸はシュート体勢に入った。

虎丸
「タイガー……！」

先ほどと同じシュートを空中に打ち上げる。そしてそのボールは空中の豪炎寺のもとへと渡った。

豪炎寺
「ストーム！！！」

豪炎寺がそのボールを蹴り飛ばすと、虎のオーラと強大な炎を纏ったシュートがゴールへと向かう。

シデン
「止めてみせる！」

シデンは再び腕に刀のオーラを纏い、ボールに向かって斬りかかる。

シデン
「紫電一閃！！」

そして刀とボールが激突する。

シデン
「ハァァァァァァア！！」

咆哮を上げながら腕に力を入れるシデン。しかし、シュートの威力はまったく落ちない。

シデン
「くっ……防ぎ…切れない……うわぁぁあ！！」

余りのシュートの威力に、オーラで出来た刀は折られ、ゴールを許してしまった。

角馬
『ゴォォォォォル！！豪炎寺と虎丸の連携シュートが炸裂！』

ピィィィィィ

角馬
『ここで前半終了！両チーム同点のまま、後半戦を迎えます！』

ホイッスルが鳴り響き、勝負は後半戦へと持ち越された。

つづく

対決！雷門中学・後編（前書き）

雷門中との試合の決着です。

対決！雷門中学・後編

天照ＶＳ雷門の試合は１対１の同点で前半が終了し、現在はハーフタイム中である。

雷門側のベンチでは、作戦会議が行われていた。

豪炎寺
「まさか同点で前半終了とはな……」

染岡
「あぁ…正直あいつらを舐めてた」

染岡は悔しそうに歯を食い縛る。

鬼道
「ヤツ等の強さは本物だ。間違いなく強豪レベルだ」

円堂
「みんな！後半も全力で行くぞ！！」

『おう！！』

鬼道
「シャドウ、染岡と交代だ」

シャドウ
「わかった……」

染岡
「任せたぜ」

染岡の言葉に、シャドウは無言で頷いた。

その頃、天照側ベンチでも作戦会議が行われていた。

中谷
「凄い…！あの雷門と同点だよ！」

しおり
「もしかしたら勝てるかも！」

銀華
「元々そのつもりだ」

ラクダ
「だけど、あの円堂守さんからゴールを奪うのは至難の技だよ」

部島
「そうですね。さっきのは不意をついた一点ですが、真っ向勝負で挑んだら確実に止められますね」

穴沢
「実際、銀華先輩の一番強い必殺技、シルバーブレットが止められているからな」

ツバサ
「僕たちのシュートじゃ、通用しないかもね」

次々と不安の言葉を口にするメンバー。そんなメンバーに銀華は……

銀華
「それがどうした」

と一蹴した。

銀華
「どんな形であれ、相手から点を取るのがサッカーだ。一人がダメなら二人、二人がダメなら三人。何がなんでも点を取りに行く！この試合、勝つぞ！！」

『おぉぉぉぉー！！！！』

銀華の激励に気合を入れなおす天照メンバー。それと同時にハーフタイムが終了し、後半戦が始まった。

角馬
『さぁ後半の開始です！得点は同点！天照中のキックオフで試合開始です！！』

銀華
「ラクダ！」

ラクダ
「よし！」

角馬
『天童のパスで月野にボールが渡った！そのままドリブルで上がっていく！』

半田
「行かせるか！」

角馬
『半田の激しいショルダーチャージ！』

ラクダの後ろから半田が追いつき、ラクダに肩をぶつけてくる。

ラクダ
「その程度のチャージで……舐めるなぁ！！」

半田
「なに！？うわぁぁ！！」

角馬
『なんと！簡単に半田を弾き返した！何という突進力だ！！』

ラクダ
「中谷！！」

そのままラクダは中谷にパスを出し、それを受けた中谷はドリブルで上がる。

壁山
「行かせないっス！」

栗松
「ここで止めるでヤンス！」

中谷
「なら…透明フェイント！！」

中谷がそう叫んだ瞬間、中谷の姿が消える。

栗松
「え！？」

壁山
「き、消えたっス！」

壁山と栗松が動揺している間に、中谷は二人の後ろに姿を現す。

角馬
『おっと中谷！姿を消す必殺技で壁山と栗松を抜いたぁ！！』

中谷
「銀華！」

銀華
「おう！」

角馬
『中谷からボールを受けた天童！ゴールは目の前！そのままシュートか！？』

円堂
「来い！何度だって止めてやる！！」

銀華

「……フッ」

すると、銀華はシュートを打たず、踵でボールをトンッと後ろに転がす。

円堂
「なに！？」

角馬
『おっと天童ここでバックパス！ボールを受けたのは……』

しおり
「ナイスパス！銀華君！」

角馬
『中目だぁ！！』

ボールを受け取ったしおりはそのままシュート体勢に入る。

しおり
「ハァァァ……」

すると、しおりの周りにいくつもの文字が出現し、ボールに纏わりつく。

しおり
「スクリプトバスター！！」

それを思いっきり蹴り飛ばし、ボールは様々な文字と共にゴールへと向かう。

円堂
「させるか！」

円堂がそう言うと、円堂の手に金色のエネルギーが溜まっていく。

円堂
「真イジゲン・ザ・ハンド！！！！」

そのまま手を地面に叩きつけると、円堂の周りにドーム状の障壁が出現し、ボールと激突する。すると、そのボールは上へと流され、ゴールバーを越えていった。

角馬
『だがしかし、ここは円堂はしっかりと止めた！』

円堂
「よし…いけぇ！」

円堂がゴールキックでボールを蹴る。

マックス
「よし！」

そのボールを半田が受け止め、そのままドリブルで上がる。が…

ヒュン！

マックス
「えぇ！！？」

風切
「遅いっスねぇ……そんなんじゃ、俺のスピードについて来れないっスよ！！」

角馬
『なんと風切！目にも止まらぬ速さでボールを奪取！そのまま素早

いドリブルで上がっていく。何というスピードだぁ！！』

鬼道
「風丸！止めろ！」

風丸
「分かってる！」

風切の前に風丸が立ちふさがる。

風切
「アンタが雷門の疾風ディフェンダーの風丸先輩っスね？俺とどっちが速いか勝負っス！」

風丸
「スピードなら誰にも負けない！！」

そう叫ぶと、風丸が三人に分身する。

風丸
「「「分身ディフェンス！！」」」

風切
「なっ！？」

三人に増えた風丸は驚愕している風切からボールを奪い取った。

風切
「くそっ…！奪い返してやるっス！」

風切は再びボールを奪い返そうとするが……

風丸
「そんな速さでは、俺には勝てない！風神の舞・改！！」

風切
「え？う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

風丸の凄まじい必殺技により、吹き飛ばされた。

風丸
「行け、シャドウ！！」

そのまま風丸はゴール前に向かってセンタリングを上げる。それに

合わせてシャドウは足に黒い炎を纏い、回転しながら上昇していく。

シャドウ
「真・ダークトルネード！！」

黒い炎を纏ったボールがゴールを守るシデンに迫る。

シデン
「今度は…止めてみせる！」

そう言ってシデンは腕に刀型のオーラを纏う。

シデン
「紫電…一閃っ！！」

そのままボールに斬りかかった。

シデン
「オォォォォォォォォ！！」

すると、ボールを斬ることは叶わなかったが、弾き返すことが出来た。

シデン
「ツバサ！クリアだ！」

ツバサ
「はい！任せて……っ！？」

弾かれたボールをクリアしようとしたツバサ。だが、それは先ほどシュートを打ったシャドウに奪われた。

シャドウ
「ならば…こいつでどうだ！」

角馬
『おっと再びボールを奪った闇野のシュートチャンス！またもやダークトルネードかぁ！？』

シャドウ
「ハァァァ……！」

すると、シャドウの背後に黒い魔神が現れる。

角馬
『いや違う！これは……！』

シャドウ
「これが俺の…新しい必殺技……！」

そのままシャドウはボールと黒い魔神と共に空中に上昇して行き……

シャドウ
「ダークネス…ハリケーン！！！」

先ほどよりも強大な黒い炎を纏ったシュートを放った。

シデン
「なにっ！？うわぁぁぁぁああ！！」

余りに凄まじいシュートにシデンは必殺技を出す暇もなく吹き飛ばされ、ゴールを許してしまった。

角馬
『ゴォォォォオル！！闇野の新必殺技、ダークネスハリケーンが炸裂！』

シャドウ
「よし……！」

円堂
「やったぜシャドウ！」

風丸
「あんな必殺技をいつの間に！？」

シャドウの周りに雷門メンバーが集まり、彼に賞賛の言葉を送る。
一方天照メンバーはシャドウの必殺技に吹き飛ばされたシデンのもとに集まる。

銀華
「シデン！大丈夫か？」

シデン
「あ、あぁ……だがすまない。私の力が至らないばかりに、またゴールを許してしまった」

申し訳無さそうに言いながら立ち上がるシデン。そんなシデンにメンバーが笑いかける。

しおり
「気にしない気にしない♪」

ツバサ
「そうですよ！取られたら取り返せば良いだけです！」

中谷
「点を取るのは僕たちの役目だけど、点を守れる役目を持つのはシデンだけなんだ」

銀華
「いちいち取られたモンを気にしてたらキリがねぇ。気持ちを切り替えて頼むぜ！」

シデン
「みんな……」

励まされたシデンはメンバー全員を見渡すと、ギュッと拳を握る。

シデン
「わかった。ゴールは私に任せろ！その代わり、得点は頼んだぞ！」

『おう！！』

天照メンバーは意気込みを入れなおし、再びポジションに着く。

角馬
『さぁ！天照のキックオフで試合再会です！』

中谷がキックオフでボールを銀華に渡し、銀華はそのボールをしおりに渡した。

銀華
「……」

しおり
「……（コク）」

銀華としおりはアイコンタクトで何かを伝え合い、しおりはドリブルで前に出る。

虎丸
「行かせない！ハァァァア！！」

角馬
『宇都宮の鋭いスライディングが中目に迫る！』

しおり
「……クス」

虎丸のスライディングが迫っているにも関わらず、しおりは微笑を浮かべる。すると……

しおり
「ええい！！」

虎丸
「え！？」

しおりはボールを思いっきり空高く蹴り上げた。

角馬
『おおっと中目！虎丸のスライディングをかわし、ボールを空高く蹴り上げた！しかし高すぎた！誰も届かない！！』

空高くを舞うボールを呆然と見ている雷門メンバー。しかし、そんなボールに一つの影が迫る。

ツバサ
「オォォォォォオオ！！」

雷門
『何ィ！！？』

銀華
「行け！ツバサ！！」

角馬
『な、なんとぉ！！天照のミッドフィルター小龍！あの空高いボールに届いたぁ！！なんというジャンプ力だぁ！！』

ツバサ
「行くぞぉ！」

ツバサはそのままオーバーヘッドキックの体勢に入る。

ツバサ
「ウィング…ドラァァァイブ！！！」

蹴り出されたボールには羽が生え、ゴールに向かって真っ直ぐ飛んでいった。

角馬
『そのまま小龍のロングシュート！決まるかぁ！？』

円堂
「どんなシュートでも、止めてみせる！」

そう言って再び円堂は手に金色のエネルギーを溜める。

円堂
「真イジゲン・ザ・ハンド！！」

そして手を地面に叩きつけ、円堂の周りにドーム状の障壁が出現させ、ボールと激突する。そしてそのボールの軌道が徐々に上に逸れてきた。誰もが止めたと思ったその時……

中谷
「たぁぁぁぁぁぁぁ！！」

円堂
「なに！？」

なんといつの間にかゴール前に来ていた中谷が障壁に止められているボールを思いっきり蹴った。

中谷
「一人がダメなら二人。二人がダメなら……」

中谷がボールから離れると、その後ろから……

銀華
「三人だぁぁぁぁあ！！！」

銀華が現れ、回し蹴りを叩き込んだ。

銀華
「シルバー…ブレットォォォォオ！！！」

円堂
「くっ…ぬぬぬ……うわぁぁあ！！」

そしてとうとう、円堂のイジゲン・ザ・ハンドを打ち破り、ゴールに叩き込んだ。

角馬
『ご、ゴォォォォル！！なんと一度は止められたかと思われたシュートを中谷と天童がごり押しでゴールをこじ開けたぁぁぁぁ！！！！』

銀華
「っ、しゃあぁぁぁぁぁ！！！！」

銀華は大きくガッツポーズをすると、円堂と向き直る。

銀華
「見たか円堂！これが俺が一年かけて集めた、最高の仲間だ！！」

円堂
「……ハハッ！面白くなってきたぜ！！！」

その後も試合はさらに激化していく。

鬼道
「皇帝ペンギン……！」

豪炎寺・虎丸
「「二号！！」」

鬼道が指笛で召喚したペンギンと共に蹴り放ったボールを豪炎寺と虎丸が加速させ、凄まじい威力を持ったシュートとなる。

シデン
「紫電…一閃！！！」

それを渾身の必殺技で止めるシデン。

ラクダ
「ミラージュシュート！！」

蜃気楼でボールを二つに分裂させる幻惑シュートを放つラクダ。

円堂
「いかりのてっついＶ３！！」

それを円堂が地面に叩き付けて止める。このような激しい攻防が続いた。

銀華
「はぁ…はぁ…はぁ……」

円堂
「ふぅ…ふぅ…ふぅ……」

角馬
『まさに一進一退！なんという激しい試合だ！両チーム共に疲労困憊！試合終了まであと僅か！決勝点を決めるのはどっちだぁ！！？』

銀華
「アレで決めてやる！行くぞ、中谷！しおり！」

中谷
「おう！」

しおり
「うん！！」

銀華はボールをしおりに渡すと、そのままシュート体勢に入った。

しおり
「スクリプトバスター！！」

そしてそのシュートはゴールに向かわず、上空へと飛んでいった。

角馬
『おっと！中目の必殺技が空中に大きく逸れた！これはシュートミスかぁ！？』

円堂
「っ！？違う！シュートじゃない！パスだ！！」

見ると、しおりが放ったボールに中谷が追いついていた。

中谷
「浴びせ蹴り！！」

中谷がボールに踵落としを叩き込むと、そのボールはゴールに向かって一直線に飛んでいく。

角馬
『これは！シュートでシュートを加速させるシュートチェインだぁ！！』

銀華
「まだだぁ！！」

円堂
「え！？」

なんと、飛んできたボールの後ろから銀華が現れる。

銀華
「シルバー…ブレットォ！！」

そのままボールに回し蹴りを叩き込み、さらにシュートを加速させた。

角馬
『な、なんとぉ！！二度目のシュートチェインでボールがさらに加速！凄まじい威力だぁぁ！！』

銀華
「これで決まりだぁあ！！」

その威力を見て、銀華は入ったと確信した。だが……

円堂
「ハァァァア……！」

雄叫びを上げる円堂。その背後には赤いマントを纏った魔神が出現した。

銀華
「っ！？これは……！！」

円堂
「ゴッド…キャッチィィ！！！」

その魔神と共に円堂がボールに向かって両手を前に突き出すと、魔神とボールが激突する。

銀華
「行けぇぇぇぇ！！！」

円堂
「負けるかぁぁぁぁぁあ！！！」

両者の咆哮と轟音が響く。そして勝ったのは……

円堂
「……へへ」

円堂だった。

銀華
「くっ…そぉ……！」

円堂
「鬼道！！」

円堂は止めたボールをスローイングで鬼道に投げ渡す。

鬼道
「豪炎寺！！」

ボールを受け取った鬼道は胸でトラップし、そのまま豪炎寺にパスを繋ぐ。

豪炎寺
「虎丸！シャドウ！行くぞ！！」

虎丸
「はい！」

シャドウ
「あぁ！」

豪炎寺を中心に三人が並ぶ。そして……

豪炎寺・虎丸・シャドウ
「「「グランドファイアＧ５！！！」」」

三人同時にシュートを叩き込むとボールは強大な炎を纏い、ゴールに向かって飛んでいった。

シデン
「止める！紫電一閃！！！」

腕にオーラを纏い、ボールに斬りかかるシデン。だが……

シデン
「（なんだこの力…！？レベルが…違い過ぎる！！）うわぁぁぁぁぁぁ！！！」

圧倒的な力を持ったシュートの前に吹き飛ばされ、ゴールを許してしまった。

角馬
『ゴォォォォル！！！豪炎寺、宇都宮、闇野の連携シュートが炸裂！！！』

ピッピッピーーー！

角馬
『ここで試合終了！３－２で、雷門の勝利です！！』

こうして、天照サッカー部の初試合は敗北という結果に終わった。

つづく

帝国学園と新たなる決意（前書き）

今回は短め＋主人公が若干空気です。

帝国学園と新たなる決意

天照と雷門の試合は雷門の勝利で幕を閉じ、選手たちはグランドの中央で集まっていた。

円堂
「良い試合だったな、銀華」

銀華
「あぁ！」

両チームのキャプテンである銀華と円堂は互いの健闘を称えあい、握手を交わす。

銀華
「この試合が俺たち…天照中サッカー部の第一歩だ。次に試合する時は……」

円堂
「フットボールフロンティア……だろ？」

円堂が満面の笑みを浮かべながらそう言うと、銀華も釣られて笑みを浮かべる。

銀華
「そうだ。俺たちは今年のフットボールフロンティアに出場する。そこで必ずリベンジを果たす！」

円堂
「あぁ！その時も負けないぜ！！」

そう言って、二人はもう一度笑い合う。すると……

パチパチパチ……

『？』

どこからか拍手が聞こえ、全員の視線がそちらに集中する。そこには、髪をモヒカンにして白いメッシュを入れた少年と眼帯をした少

年が立っていた。

鬼道
「不動！？佐久間！？」

その二人とは、帝国学園の新キャプテンである『佐久間次郎』と帝国の司令塔『不動明王』だった。

佐久間
「久しぶりだな、鬼道」

不動
「練習試合、お疲れさん」

染岡
「何しにきやがった！？」

染岡が敵意を込めた目で睨む。

不動
「わざわざ他校の練習試合を見に来る目的なんて決まってるだろう？偵察だよ偵察。去年のフットボールフロンティアの優勝校様のな」

不動は嫌味の篭った口調で言う。

佐久間
「けどまぁ、予想外の収穫もあったけどな」

そう言いながら佐久間は視線を銀華たち天照サッカー部に向ける。
メンバー全員に緊張が走る中……

しおり
「ねぇ……あれ誰？」

しおりのこの発言でメンバー全員がずっこけた。

銀華
「だ・か・ら！お前は少しでもいいから自分で他校のことくらい調べとけっつったろ！？」

中谷・ラクダ
「「まぁまぁまぁまぁ……」」

今にもしおりに怒鳴りかからんとする銀華を中谷とラクダが二人がかりで止めに入る。

シデン
「えっと…あの二人は去年までフットボールフロンティアで４０年間無敗記録を更新していた帝国学園の人たちだ。因みに二人ともＦＩで日本代表に選ばれた実力者だ」

しおり
「へぇ～～」

シデンの説明にしおりは少々気の抜けた声を出す。

佐久間
「俺たち帝国は去年までとは違うぜ！新たな司令塔、不動。そしてもう一人、天才ミッドフィルターが加わったことで俺たちはさらにレベルアップしたんだ！！」

豪炎寺
「天才ミッドフィルター？」

天才ミッドフィルターと言う言葉に全員が興味を示す。

不動
「ん？そう言えばアイツも来てただろ？どこ行ったんだ？」

佐久間
「さぁ？雷門の校門前までは一緒だったんだが……」

不動
「ったく。いい年して迷子かよ、あのアバズレ――がっ！？」

と、不動がそこまで言いかけたその時、どこからかサッカーボールが飛来し、不動の頭に直撃した。全員が驚きながらボールが飛んできた方向を見ると、そこにはピンク色の髪で顔を半分隠した少女が立っていた。

不動
「し、忍……！」

佐久間
「小鳥遊……！」

小鳥遊
「あーきーおー……！」

『小鳥遊忍』と呼ばれた少女はゆっくりと不動に歩み寄り、胸倉を掴む。

小鳥遊
「アンタ、今アタシのことアバズレって言わなかった？」

不動
「アバズレをアバズレって言って何が悪いんだよアバズレ！！」

小鳥遊
「何ですってこのモヒカンハゲ！！」

不動
「ハゲてねぇよ！！！」

これを皮切りに口喧嘩を始める二人。それを呆れた表情で見ていた佐久間は勝手に紹介を始めた。

佐久間
「この女がさっき言った天才ミッドフィルターの小鳥遊忍。鬼道たちは一度会っているだろう？」

鬼道
「あぁ…確か真・帝国学園にいたあの女だな」

佐久間
「あの時は俺と源田と不動に隠れていたが、小鳥遊もかなりの実力者だ。何せ、あの総帥が直々に選んだんだからな」

鬼道
「総帥が……？」

鬼道と佐久間が言う総帥とは、元帝国学園の監督であり、イタリア代表オルフェウスの監督でもあった男、『影山零冶』のことである。

佐久間
「今年のフットボールフロンティアは俺たちが制する！俺たちの新たな帝国サッカーでな！！」

鬼道
「……フッ、面白い。試合する日を楽しみにしているぞ佐久間！」

佐久間
「フッ……不動、小鳥遊、帰るぞ」

鬼道の言葉に佐久間は微笑を浮かべると、未だに口喧嘩をしている不動と小鳥遊に声をかける。

不動
「チッ……わかったよ」

小鳥遊
「ふん！」

二人は口喧嘩を止め、不動は鬼道に向き直る。

不動
「……フンッ」

鬼道
「っ！？」

何も言わず、ただ意味ありげな笑みを浮かべた不動を見て、鬼道は何かを感じ取る。

佐久間
「じゃあな。フットボールフロンティアで会おうぜ！」

佐久間がそう言うと、帝国の三人はその場を後にした。それを見送った後、鬼道は円堂に声をかけた。

鬼道
「円堂……」

円堂
「ん？」

鬼道
「アイツらは何かを隠している。恐らく何かの秘策だろう」

円堂
「かもな。でも、そんなのは関係ない！」

円堂は笑みを浮かべながら続ける。

円堂
「アイツらがどんな秘策を持っていても、俺たちは俺たちのサッカーでそれを破る！それだけさ！！」

鬼道
「……そうだな」

円堂の言葉に鬼道は笑みを浮かべた。

銀華
「おい円堂。俺たちも帰るわ」

今までほったらかしだった銀華が円堂に声をかける。

円堂
「あ、おう！じゃあな！！」

銀華
「あぁ……」

そう言って銀華たちは校門に向かって歩き出した。その途中で、銀華はチーム全員に声をかける。

銀華
「どうだお前ら？何か得るものはあったか？」

銀華の問い掛けにメンバーが次々に口を開く。

中谷

「僕は奈良では最強って呼ばれてたけど…今日の試合で、それが井の中の蛙だってことを思い知らされたよ。僕は……もっと強くなりたい！」

シデン
「私も同じだ。最後の雷門のシュート…あれは私たちとはレベルが段違いだった。私はあれを止められる位に強くなる！」

しおり
「私、今日がサッカーの初試合だったんだけど、凄く楽しかった。でも、負けたときは凄く悔しかったんだ……だから、次は勝ちたい。もっともっと強くなって、絶対に！」

三人の言葉を聞いて、他のメンバーもそれに続くように頷く。それを見た銀華は微笑み。

銀華
「よっしゃ！そんじゃ明日からまたみっちり練習するぞ！目指せ！フットボールフロンティア制覇！！」

『おぉぉぉぉぉぉ！！！』

帰り道で強く意気込みを入れる天照サッカー部。それを影から見ている三人組の姿があった。

佐久間
「天照中学か……面白い学校を見つけたな」

不動
「ふん、俺から見ればまだまだ弱小だな」

小鳥遊
「アンタのその節穴の目で？」

不動
「あぁ？」

小鳥遊の嫌味に反応し、不動と小鳥遊は睨みあう。それを見ている佐久間は呆れたように溜め息をつく。

佐久間
「お前ら…幼馴染みなんだったらもう少し仲良くしろよ……」

不動
「けっ……」

小鳥遊
「ふん……」

佐久間の仲裁に二人はそっぽを向く。それを見て佐久間はもう一度溜め息をつく。

佐久間
「ハァ……それより、早く学校に戻ってあの必殺技の練習をするぞ」

小鳥遊
「そうね、早く完成させましょ。デスゾーンの最終進化系と……」

不動
「帝国の最強必殺技をな……」

そんな会話をしながら三人は帰路についた。

フットボールフロンティア開催まであと…二週間。

帝国学園と新たなる決意（後書き）

不動と小鳥遊が幼馴染みと言う設定は作者の捏造です。ご了承ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6931r/

イナズマイレブン~もう一つの伝説~

2011年5月16日23時03分発行